

SAGA ART BRUT NETWORK

平成 29 年度 障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

はじめに

佐賀県では、平成 24 年に全国障害者芸術・文化祭さが大会「バラエティ・アート・フェスタさが 2012」が開催されたことをきっかけに、アール・ブリュット展をはじめ、障がいのある方たちの芸術文化に対する理解や取り組みが進んできました。そのような中、当法人では平成 27 年度より「障害者の芸術活動支援モデル事業」に取り組み、「SAGA ART BRUT NETWORK CENTER (SANC)」での相談活動をはじめ、佐賀県で障がいのある方たちの芸術文化活動が広がっていくためのプログラムに取り組んできました。

今年度の障害者芸術文化活動普及支援事業で実施したプログラムも、これまでの佐賀県での取り組みを踏まえて、いま何を実施すれば障がいのある方たちの芸術文化活動が地域のなかでもう一步広がっていくかを考えながら実施してきました。

この一年間で主に取り組んできたことは「環境づくり」です。

障がいのある方や支援者の方たちから相談を受ける「SANC」での相談活動をはじめ、展示会を通じた研修、公募展や街なか展示など、地域で障がいのある方たちが芸術文化活動に取り組むことができる環境づくりや、いろいろな人たちに触れ合い知ってもらうための環境づくりを進めてきました。

障がいのある方たちが生み出す作品と触れ合うと、時にひとつの側面では測れない、人の多様さや複雑さや豊かさに気づかせてもらうことがあります。

そのような出来事が、障がいのある無しにかかわらず、誰もがひとり一人の個性や素晴らしさを持っていることを認め合うことにもつながっていくのではないかと思います。

私たちは、障がいのある方たちが芸術文化活動を通じて地域のなかで豊かに暮らしてほしいという願いとともに、その人となりや作品の魅力に多くの人がつながっていただく機会を通して、豊かな地域社会づくりに貢献していきたいと思っています。

社会福祉法人はる
理事長 福島 龍三郎

ご挨拶

県の文化行政につきましては、日ごろからご支援、ご協力を賜わり、厚くお礼申し上げます。

障がいのある人たちは、誰かにその作品を見せたり、その作品が評価されることを求めて制作しているわけではないのに、何故か多くの人々がその作品に魅了されています。既存の枠にとらわれない自由な発想、そして、純粋に作品を制作するその姿、これら全てのものが、多くの人々の想像を超える創造性豊かなものであって、それが、なによりも本人のありのままを純粋に表現しているものだからではないでしょうか。障がいのある人が、様々な表現活動を通して、様々な人たちと出会い、一人ひとりの魅力や才能が認められ、社会と繋がること。そして、その取組が広がっていくこと。佐賀で、そのような社会が実現できることは素晴らしいことだと思います。

社会福祉法人はるでは、「障害者の芸術活動支援モデル事業」に引き続き、「障害者芸術文化活動普及支援事業」を受託され、障害のある人の文化芸術活動の支援にご尽力いただきました。モデル事業で培われた経験やノウハウのほか、これまでの取組から見てきた新たな課題を踏まえ、相談支援や人材育成はもとより、新しくパフォーマンス分野の支援も開始されるなど、障害のある人の文化芸術活動のさらなる広がりや、行政では担うことができない現場の実情に応じたきめ細かな支援を行っていただきました。これらの活動を通して、人が表現することの無限の可能性を伝えるとともに、人と人が繋がり、人の想いに寄り添う社会が実現できるよう、一層の発展を期待しています。

本事業にご尽力された社会福祉法人はるの皆様、また、活動を支援してくださいました関係者の皆様に深くお礼申し上げます。県としても、引き続き障害のある人の文化芸術活動の支援を推進してまいりますので、今後とも、ご理解、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

佐賀県文化・スポーツ交流局文化課
課長 橋口 泰史



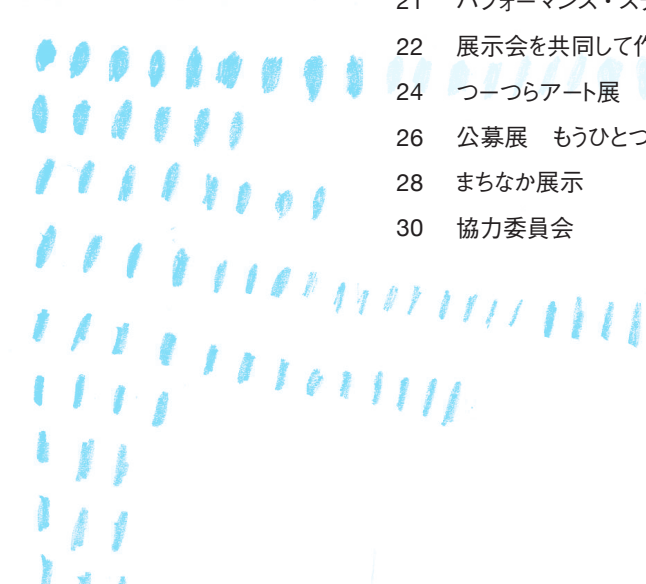
目次

- 02 はじめに
- 03 ご挨拶
- 04 目次
- 06 厚生労働省 平成 29 年度「障害者芸術文化活動普及支援事業」とは

Chapter 1 事業概要

- 08 SAGA ART BRUT NETWORK が目指すこと
- 10 アール・ブリュットとは

Chapter 2 事業報告

- 12 相談対応
 - 13 芸術活動の拠点を運営〈アトリエ・サンク〉
 - 14 障がいのある人の表現活動を考えるセミナー
 - 16 オリジナルグッズを作ろう! ワークショップ
 - 18 お気に入りの作品をグッズにするためのセミナー
 - 19 講演会 人が表現すること
 - 20 緊張と向き合うワークショップ
 - 21 パフォーマンス・ステージ〈スター発掘プロジェクト〉
 - 22 展示会を共同して作り上げる試み
 - 24 つーつらアート展
 - 26 公募展 もうひとつのものさし展
 - 28 まちなか展示
 - 30 協力委員会
- 

Chapter 3 調査・発掘・評価・発信

- 34 アンケートの実施
- 35 公募展「もうひとつのものさし展」
パフォーマンス・ステージ「スター発掘プロジェクト」
- 36 ACTIVITY SCENE #1

Chapter 4 成果と課題

- 38 今年度の成果
- 39 これからの課題
- 40 ACTIVITY SCENE #2

もうひとつのものさし展 作家紹介

- 42 加茂 賢一
- 43 岩永 真実
- 44 江副 朱華里
- 45 野田 広
- 46 広報資材資料／情報発信資料

厚生労働省

「障害者芸術文化活動普及支援事業」とは

芸術活動は障害者にとって重要な社会活動の一つであり、近年では、既成の概念にとらわれないその芸術の特性が、国内外において一定の評価を受けるようになるなど、芸術活動を通じた障害者の社会参加の一層の促進が期待される。

「障害者の芸術活動支援モデル事業」（平成 26～28 年度実施）で培った支援ノウハウを全国展開することにより、障害者の芸術文化活動（美術、演劇、音楽等）の更なる振興を図っています。



Chapter 1

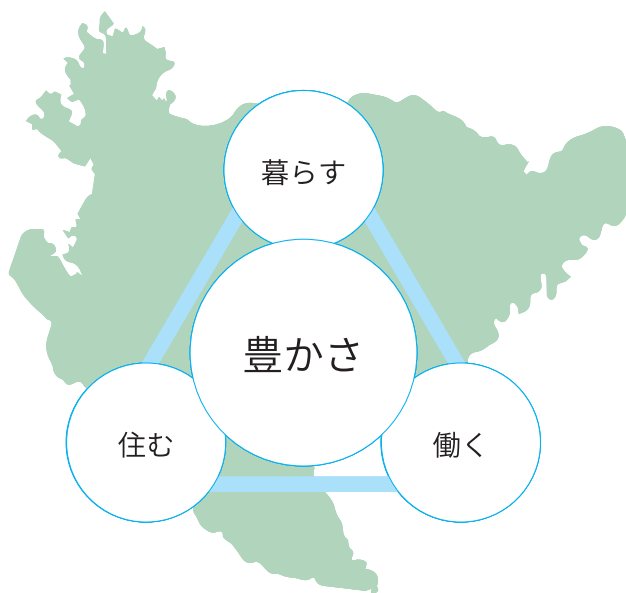
事業概要

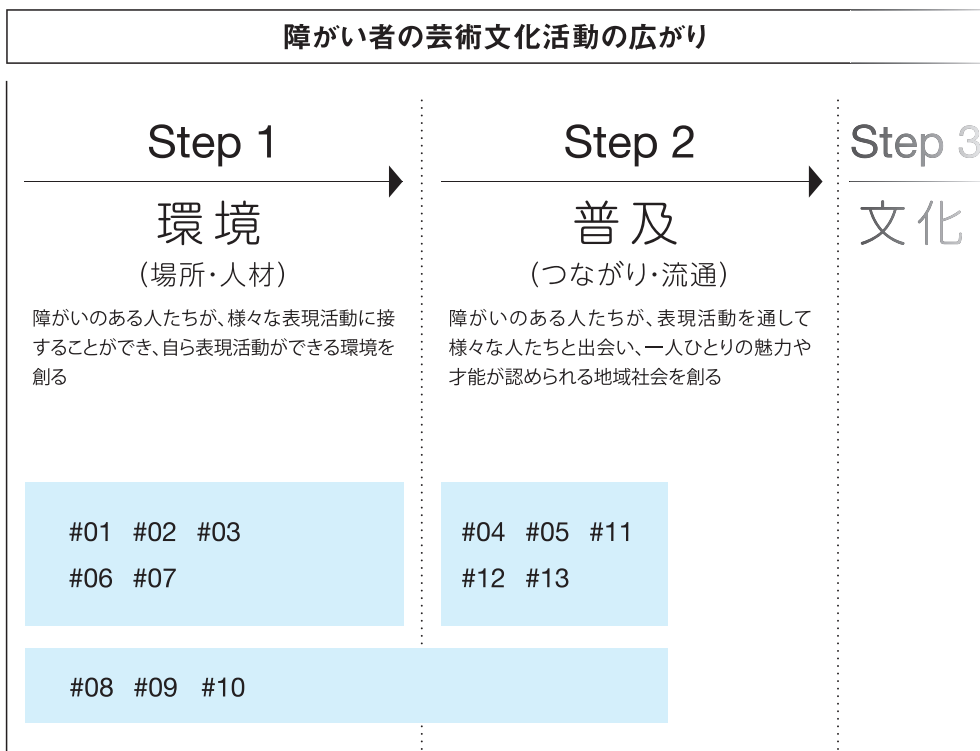
- SAGA ART BRUT NETWORK が目指すこと
- アールブリュットとは

SAGA ART BRUT NETWORK

が目指すこと

障がいのある方たちが芸術文化活動を通じて
地域のなかで豊かに暮らしてほしいという願いとともに、
その人となりや作品の魅力に
多くの人がつながっていただく機会を通して
豊かな地域社会づくりに貢献します。





平成29年度 SAGA ART BRUT NETWORKの事業

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| #01 相談対応 | #08 パフォーマンス・ステージ〈スター発掘プロジェクト〉 |
| #02 芸術活動の拠点を運営〈アトリエ・サンク〉 | #09 展示会を共同して作り上げる試み |
| #03 障がいのある人の表現活動を考えるセミナー | #10 つーつらアート展 |
| #04 オリジナルグッズを作ろう! ワークショップ | #11 公募展 もうひとつのものさし展 |
| #05 お気に入りの作品をグッズにするためのセミナー | #12 まちなか展示 |
| #06 講演会 人が表現すること | #13 協力委員会 |
| #07 緊張と向き合うワークショップ | |

アール・ブリュットとは

Art は「芸術」、Brut は「磨かれていない」、「(加工されていない) 生のまま」という意味を持ち、日本語に直訳すると「生(き)の芸術」と表されている。

フランス人画家のジャン・デュビュッフェ (1901 - 1985) が、1945 年にこのような芸術を「アール・ブリュット」と呼び、その概念を提唱するとともに欧州の作品を中心に蒐集してきた。

既存の文化や流行などに影響されずに自身の内側から湧き上がる
衝動のままに表現した作品をさす言葉。

アール・ブリュット作家の中には、知的または精神などの障がいのある作家も
多く含まれるが、障がいの有無にかかわらず、多様な作家がいる芸術分野である。
欧米では美術館やギャラリーが多数存在。

日本とのかかわり

アール・ブリュットの総本山として世界的にも名高いアール・ブリュット・コレクション (スイス ローザンヌ市) で「Japon」展が開催され好評を博し、2010-2011 年には、パリ市立アル・サン・ピエール美術館 (フランス パリ) で約 12 万人の観客を動員した「アール・ブリュット ジャポネ」展が開催される。また、日本のアール・ブリュットを紹介する展覧会がヨーロッパ 7 カ国 (オランダ、イギリス、ベルギー、オーストリア、ドイツ、デンマーク、イタリア) を巡回する「ヨーロッパ巡回展」が開催されるなど、今、日本のアール・ブリュットは世界的に注目されており、徐々に広がりをみせている。

Chapter 2

事業報告

- #01 相談対応
- #02 芸術活動の拠点を運営〈アトリエ・サンク〉
- #03 障がいのある人の表現活動を考えるセミナー
- #04 オリジナルグッズを作ろう! ワークショップ
- #05 お気に入りの作品をグッズにするためのセミナー
- #06 講演会 人が表現すること
- #07 緊張と向き合うワークショップ
- #08 パフォーマンス・ステージ〈スター発掘プロジェクト〉
- #09 展示会を共同して作り上げる試み
- #10 つーつらアート展
- #11 公募展 もうひとつのものさし展
- #12 まちなか展示
- #13 協力委員会

相談対応 〈サンク（Saga Art Brut Network Center）〉

相談対応を始めて3年が経ち、当初の芸術活動についての漠然とした相談から、展示や商品化・人材確保など、より具体的な内容が増えている。

人材育成

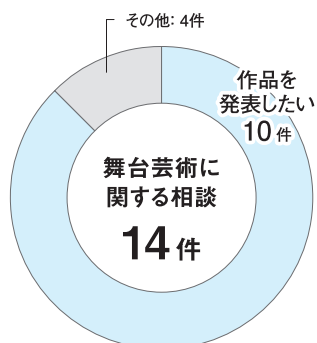
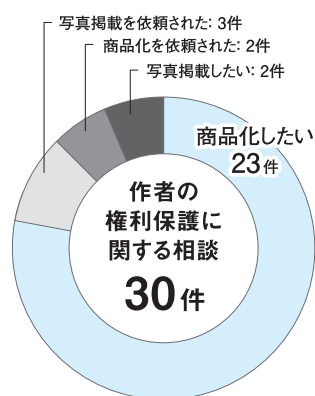
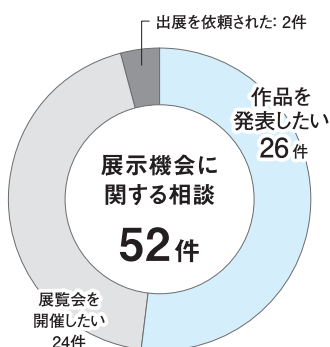
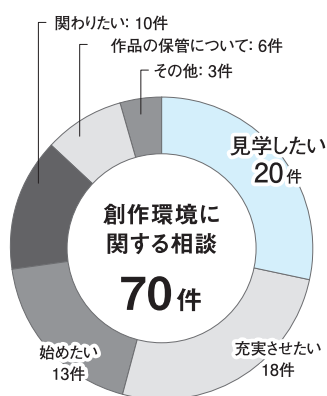
場所

つながり

初心者

取り組んでいる方

支援者



【相談例】

創作環境に関する相談

- ・アートの時間にマンネリ感があり、活動の選択肢を広げたい。
- ・（相談者の）施設ではどのようなアートのスキルを持ったスタッフが必要か。

展示機会に関する相談

- ・展示の機会が少なく、企画があれば応募したい。
- ・展覧会を開催したいので協力していただけないか。

作者の権利保護に関する相談

- ・施設で作った作品を使って商品を作りたい。どのようなスキルが必要になるか。
- ・出展依頼を行いたい、作品取扱規定を作ったので見てほしい。

舞台芸術に関する相談

- ・歌や演奏を披露する機会がありますか。
- ・施設に面白い表現を行う方がいて、ぜひ見てほしい。

芸術活動の拠点を運営〈アトリエ・サンク〉

障がいのある方が、気軽に芸術活動を行える拠点として、
芸術活動の支援・普及のネットワークを築く拠点としてのアトリエ・サンク。

人材育成

場所

つながり

初心者

取り組んでいる方

支援者

やってみる



アトリエ・サンクは、自宅や事業所等でなかなか芸術活動を行えない方や、普段のライフサイクルで芸術活動がむずかしい方、汚れる心配をせずに思いつき絵の具で描きたい方などが気軽に立ち寄れて、安心して芸術活動に取り組んで頂くためのスペースです。

障がいの有る無しに関わらず、気兼ねなく集い自由に創作活動ができる場として、月2回のアトリエフリーオープン日「ゆつつらアートDAY」（18回開催、255名の参加）を開催。

絵の具や色鉛筆、毛筆セット、粘土など各種画材の貸し出しも行なっています。

加えて、事業所として（2団体）アトリエを利用する例もあります。

親子で創作に取り組まれたり、保護者さん同士のほっと一息の場としてもご利用いただきました。また、お気に入りの道具を持参して作品展へ出品するためにアトリエに通う方、他県から障がい特性に合わせて、落ち着いた環境を求めて来られる方など利用のバリエーションも多岐に渡りました。

創作環境の見学を希望されることもあり、障がい者の芸術活動の支援・普及の拠点としての役割も担っています。

1

2

事業報告

3

4

障がいのある人の表現活動を考えるセミナー

芸術活動を始めるとの心構えと大切なこと

創作・展示・販売の過程で発生する権利を会場の皆さんと学びました。

人材育成

場所

著作権

支援者

学生

初心者

取り組んでいる方



佐賀市アバンセにて『障がいのある人の表現活動を考えるセミナー～アート活動を「楽しむ」こと「発信する」こと～』を開催しました。

講師には、樋口龍二氏（NPO 法人まる）と安永恵子氏（安永法律事務所）にお越しいただき、佐賀県のみならず、福岡県、長崎県、大分県から43名の方にご参加いただきました。

はじめに、“アイダをつなげるアート活動の可能性”では、樋口さんがこれまで実施してきたものの活動について写真を交えて紹介していただき、「どうしてアートに取り組むのか。」「一人一人の表現に向き合い続けることが今の活動につながっている。」など、これまで取り組まれてきた活動の根本にある考えや思いを語っていただきました。

次に、“作品が生まれるとき。商品になるとき。知っておくとトクをするやさしい「権利」のはなし”では、弁護士の安永さんより、創作活動にまつわる権利「所有権・著作権」について、事業所で発生する事例を挙げながらお話いただきました。

最後はお二方に対する質疑応答。時間をオーバーしても湧き出てくる質問に、参加者の皆様の熱意をひしひしと感じました。

アンケートにも多数の感想を頂き、充実した内容であったことが伺えました。

参加者アンケートから

【セミナー全体を通して】

☐ 共生社会にむけてアートを通じて壁をなくす。障がいがある方と共に同じ目標や喜びを感じられる手段としてアートがある。そんな風に思っているけど現実的でないと考えていましたが、自分たちにも出来ると思える内容でした。

☐ ものづくりだけではなく、社会へのアウトプットまでされていて、色々なところで勉強になった。

☐ リアルな話が聞けて良かった。色々な事業所や学校、保護者等の方々が参加されていたのでグループディスカッションみたいな事もやってみたかった。

☐ どのお話も勉強になる事ばかりで事業所の活動に、情報をスタッフ皆で共有して活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

【アイダをつなげるアート活動の可能性】

☐ 思い・活動・考え方に対し、取り組みがしっかりと行えている事例であり、良かった。スタッフが同じ方向を目指して活動するチーム作りが難しく、チームでの取り組み方が詳しく知りたかった。

☐ 支援者が手を出しすぎない支援に目からウロコでした。先を読みすぎる支援は利用者の意欲を失くしてしまうという事に気付かされました。自発的な制作意欲を増やすことが大事だと感じました。

☐ アートはあくまで社会とつながる為の手段！その人らしく生きていく為の手段！スタッフは社会と福祉を繋ぐプロデューサーになってほしいという言葉が印象的でした。表現を支援できる環境作りが大事。

☐ 「やらせる事ではない」という所でとてもそうだなー、と思いつつ、引出す難しさを感じました。

☐ 今後の創作活動のヒントや支援者、スタッフのあり方について考える機会となりました。



活発な質疑応答が行われました。

【作品が生まれるとき。商品になるとき。知っておくとクをするやさしい「権利」のはなし】

☐ 作られた作品の具体的な扱いや金銭的な問題などが明確になり、利用者さんへの意欲の持たせ方の一つとして話ができるようになるのではないかと思います。

☐ 所有権や著作権など法律の話を知りやすくお話しいただき、工賃についても考える機会になりました。

☐ 日常の支援の中で、具体的にどの法律が当てはまるのかが知れて良かったです。

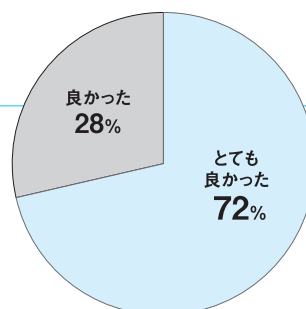
【商品化に向けてこんな疑問？ 弁護士の先生に相談してみよう。】

☐ 工賃などの割り振りはどの事業所さんも悩まれているんだなあ、と思いました。

☐ 工房まるさんでは評価について作った本人にも決めさせているところ等おもしろいと思いました。

☐ 自分が考えていなかった事が実は所有権や著作権に関わっていたり、気をつけないといけない事もあったんだと気付かされました。

【全体を通しての感想】 n=28



DATA

【講師】 樋口龍二氏(NPO法人まる)／安永恵子氏(安永法律事務所)

平成29年8月5日(土)／アバンセ(佐賀市)／43名

オリジナルグッズを作ろう! ワークショップ

障がいがあってもなくてもみんなで楽しめるアートを。自分で描いた絵が缶バッジやステッカーになる流れを通して、グッズ化の流れと創作の楽しさを体感しました。

つながり

グッズ作り

障がいのある人もない人もOK

初心者

支援者

県障害者芸術活動支援事業



今年度、佐賀県内 4 カ所で「オリジナルグッズをつくろう! ワークショップ」を開催しました。

ワークショップ参加者の皆さんは、ペンやクレヨンを使って好きな絵を楽しそうに描かれていました。

参加者の描いた絵やイラストをパソコンに取り込み、加工をして、缶バッジの型にはめ込む、という工程を参加者の皆さんが体験。缶バッジが完成した時には「かわいい!」「すごい!」と、子供たちも大人も思わず声が上がりました。

子供たちは、講師が絵やイラストをパソコン上で加工する作業に興味深々に覗き込んだり、普段支援に携わっている支援者の方々も、好きな絵を描いてグッズになる様子を楽しまれていました。



参加者アンケートから

【鳥栖会場】



- ☐ 子供が絵や工作に興味を持っているので、こういう自由参加のイベントがたくさんあれば嬉しいです。子どもと楽しくお絵かきできました。
- ☐ 無料でこのようなイベントをして頂いてありがたかった。楽しかった。子供たちも喜んでた。
- ☐ またこんな機会があれば参加したいです。
- ☐ 障がいのある子供さんの作品も色々見られたので良かったです。

【唐津会場】



- ☐ サンクのような自由に絵を描きながら過ごせるスペースが県内に数カ所あればいいですね。
- ☐ 自分の描いた絵が、バッジやステッカー等に形を変えて出来上がる事で、ただの画用紙がいきに見栄えのいいカッコいいモノに変化!子供たちがとても喜んでいました。
- ☐ 世界で一つだけのバッジを作れるなんて、夢のようなことなので、また作りたいです。好きなバッジができて良かったです。

【多久会場】



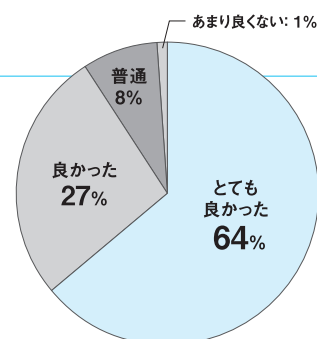
- ☐ メンバーの方々参加してましたが良い表情をしていました。地域との交流、つながるイベント、これからもぜひ何かあれば参加したいです。
- ☐ バッチ作りもステッカー作りもとても楽しかったです。元気になりました!! ありがとうございます♡
- ☐ 家では出来ない体験が出来るイベントが増えるのは嬉しいです。ありがとうございました。

【鹿島会場】



- ☐ イラストの描き方のコツみたいな事が知りたいです。発達障がい持ちです。
- ☐ イラストの活動を活用して作業してみたいです。私の通うところには今はイラストは休みの時間の余暇程度なんで。
- ☐ 娘が楽しくアート活動をしてくれたらと思っています。相談することがあるかもしれません。
- ☐ はるの活動に参加して自分がやりたい事が見えてきます。本年も勉強させていただきたい。障がいのある方も楽しく参加できていて、私も話しかけてもらってとても楽しい気持ちになりました。

【感想】 n=118



DATA

【講師】樋口龍二氏(NPO法人まる) ※全会場

【鳥栖】平成29年9月9日(土)／フレスポ(鳥栖市)／77名(子供45名、大人32名)

【唐津】平成29年9月16日(土)／アルビノ(唐津市)／75名(子供48名、大人27名)

【多久】平成29年12月16日(土)／ボンドバ(多久市)／63名(子供40名、大人23名)

【鹿島】平成30年1月13日(土)／エイブル(鹿島市)／89名(子供59名、大人30名)

お気に入りの作品をグッズにするためのセミナー

グッズ化するためにはどんな準備が必要か。事例をもとに販売のノウハウを学びつつ、心構えやデータ化するためのスキルを身につけました。

人材育成

つながり

グッズ作り

初心者

支援者

県障害者芸術活動支援事業



4ヶ所で実施した「オリジナルグッズをつくろう! ワークショップ」の開始前に、グッズ化に特化したセミナーを実施。関心のある福祉事業所のスタッフや、保護者の皆さんが集まりました。

講師の樋口さんより、「NPO 法人まる」の取り組み例を通して、どうしてアートに取り組んでいるのか、グッズを通して何を発信したいのか、という基本的な考えを持った上で、ブランディングの必要性や、デザイナーと協力することでできること、データ化を行う際の作品の保管方法や、スキャンを行う際の解像度・管理番号の重要さなどを伝えていただきました。これらを行うことが「福祉」という枠を超え、一般の方にも手に取ってもらえるような販路につながっていくことを、わかりやすく学ぶことができました。

参加者アンケートから

- ☐ 私たち支援者が利用者さんたちが自己表現された作品を、社会とつなげていくんだ・・という役割を感じました。
- ☐ 作品を作った後、売る所は、福祉関係のイベント・バザー等の時しか売れないと思っていたので話を聞いて驚きました。自分たちの作業所をもっと活かせるように学んで、支援していきたいと思います。
- ☐ 就労事業所で取り入れられるようなアートを利用した作業があれば教えていただきたいです。

DATA

【講師】 樋口龍二氏 (NPO法人まる)

創作ワークショップ(P16,P17)の導入として開催したセミナー

講演会 人が表現することということ ～障がいのある人たちの表現活動を通して～

作家の田口ランディ氏を招いて、障がいを持った方の文化芸術活動、人が表現することの新たな可能性について語っていただきました。

人材育成

表現とは

つながり

新しい可能性

県障害者芸術活動支援事業



佐賀県だけでなく、福岡県や長崎県からお越しいただき盛況の中で開催した講演会。

「障がいを持った方の表現になぜ惹かれていくのか。それは、表現をする際に、私たち大人が苦しむ“何を書いて良いのか分からない”という感覚に対して、スラスラと進められることも要因かもしれない。」「大人が表現をするために何が必要か。」「クリエイティブな衝動がわく状態とはどのようなことか。」「普段支援現場で向き合っていくなかで、まず支援者自身がクリエイティブな状態を感じてもらう。」「潜在意識に問いかけるなど、記憶との向き合い方を知ること。」「記憶にアクセスして出てきたものを、どのようにイメージし、言葉を選んでいくのか。」など、「表現」について田口氏ならではの貴重な話を聴くことができました。質問も尽きず、充実した時間となりました。

参加者アンケートから

- ☐ 明日から表現する事が楽しみになりました!!
- ☐ 頭で考えてばかりでは前に進めなかった私に気づけて良かったです。「できる!!」でチャレンジしていこうと思います。
- ☐ 私もこれからどんどん表現していく事を決めました! 表現ってむずかしいと思ってたけど、ワクワクしてきました! とても楽しかったです!!
- ☐ 「表現する人」のためだけではなく、毎日の日常を生き生きと生きるためにもとてもいいと思いました。
- ☐ 第2弾を企画してほしい。実践したい。

DATA

【講師】 田口ランディ氏(作家)

平成29年10月14日(土)／佐嘉神社記念館(佐賀市)／56名

1

2 事業報告

3

4

緊張と向き合うワークショップ

どのように「緊張」と付き合っていくか。演者のみならず、観客と一緒に場の空気を作っていく素敵な空間を体験しました。

人材育成

場所

誰でもOK

自信を持って

支援者も表現者

1st
STAGE


様々な場面で、力を発揮するために誰も避けては通れない「緊張」。

「緊張」を理解し、楽しんでいくプログラムを実施。参加者全員が見守る中、一人ずつ立ち上がって順番に自己紹介を行い、自分の「緊張」を知ってもらうことから始まりました。

「観られていることが緊張につながるため、演じながら、こちらが相手を見ることが大事。」と講師の小松原氏。

「見られること」「見ること」両方を体感する「向き合った相手の表情や声をコピーしてみる」「イルカの調教を模したしぐさ当てゲーム」などのワークを通して、初対面の参加者同士が次第に緊張がほぐれていく様子が印象的でした。

参加者アンケートから

- ☐ 緊張がほぐれる準備体操が楽しかったです。
- ☐ お互いの顔真似をしたり、楽しいワークショップでした。
- ☐ 私自身、表現が苦手ですが、その人の真似をする、合わせてみる、それだけでもお互いに楽しめる心地よい時間になりました。
- ☐ 初めての方と一緒に楽しめました。
- ☐ 「イルカの調教」でしぐさを当てることになった時、恥ずかしかったけど楽しかった。
- ☐ とても楽しく参加出来ました。

DATA

【講師】小松原修氏(特別支援学校勤務ドラマディレクター)
平成29年10月14日(土)／バルーンミュージアム(佐賀市)／20名

1

2

事業報告

3

4

パフォーマンス・ステージ〈スター発掘プロジェクト〉

歌いたい。奏でたい。踊りたい。演じたい。

障がいあるなしを問わない、パフォーマーのためのステージ。

人材育成

場所

心から湧き上がる表現

誰でもOK

自慢の一芸

2nd
STAGE



障がいのあり無しにかかわらずパフォーマーを募集。4名がエントリーし、ダンス、バンド、弾き語り、即興ダンスのメンバーが集結しました。事前のワークショップから、ステージの皆さんは緊張を楽しめるようになり、観客も一体となった会場の雰囲気ですターしました。

それぞれ10分の持ち時間でパフォーマンスを披露した後は、時間いっぱいまで観客との質疑応答がスタート。「緊張したか」「見どころはどこか」「どうして出演しようと思ったか」など、双方熱いやりとりがかわされました。

「悔いなくできた」「演じられる舞台があってうれしい」「また出たい」「次は出演したい」など次年度につながるステージとなりました。

参加者アンケートから

- ☐ その人の才能はその人そのもの！ちょっとした勇気、遊び心、好きなことやってみる、そして努力する。皆さんの1人1人の世界に引きこまれ素晴らしかったです。
- ☐ 自信を持ってパフォーマンスされていて、見ごたえがありました。もっとこういう機会があればと思いました。
- ☐ 自由度の高いパフォーマンスステージで大変楽しく歌う事が出来ました。
- ☐ おもいきりひろうできてよかった。

DATA

【講師】小松原修氏(特別支援学校勤務ドラマディレクター)
平成29年10月14日(土)／バルーンミュージアム(佐賀市)／20名

1

2

事業報告

3

4

展示会を協働して作り上げる試み

展示会の「企画、準備、展示」を通して、アート担当者同士のつながりを深めるとともに紹介したい表現を改めて考える機会となりました。

人材育成

つながり

流通

展示方法

作品を自慢する

初心者

取り組んでいる方



参加型展示会「つーつらアート展 - 3-」の準備のため、参加事業所で実行委員会を作り、コンセプト、作品選定、展示構成を組み立てていきました。佐賀大学の柳先生からアドバイスをいただきながら実行委員の皆さんが話し合いを重ねて作りあげた展覧会です。

実行委員会【第1部】のテーマは、“お気に入りをお自慢しよう!”。普段の利用者さんとの関わりや最近うれしかったことなど、お気に入りの利用者さんの作品や写真を持ち寄り紹介し合いました。一番近くにいる支援者だからこそ知っている、利用者さんの一面。支援者の見方次第で様々な価値観がうまれるということが窺い知れました。新しい気づきによって、普段の支援も変わるのではないか。話しを進めていくなかで、今回の展覧会開催の目的

や意義を共有しました。

【第2部】“展示方法を考えてみよう!”では、第1部で共有した内容を念頭に、実際に展示したい作品を持ち寄りました。それぞれの作品を全員で見て回りながら、展覧会全体のイメージやバランス、各作品にあった展示方法や「絵だけではなくてそこに至る行為も紹介したい」など、様々な発想が生まれ、どうやって紹介できるかを確認しました。

【第3部】は、展覧会期初日の前日。“実際に展示しよう!”ということで、各自作品を展示する作業を行いました。実際に会場へ来ていただいた作家ご本人もいらっしゃいました。

参加者アンケートから

【1-1：展覧会開催の目的・意義を共有】

- ☐ 福祉に関わる方にもっとアートの素晴らしさを伝えられる事がすごく良いなと思いました。
- ☐ 光と影の世界観の中で一人一人の方へ生きがいが生まれることはとても良いと思います。
- ☐ 障がいのある方への視点、見方が変わってくると、本当にいいなと思います。

【1-2：利用者の作品・日常を紹介しましょう!】

- ☐ 利用者さんの作品の事もですが、支援者さんの想いや考えがとても参考になった。
- ☐ その方の日常生活の様子まで作品から伝わってきたような気がします。
- ☐ 自分の気持ちや感情を表現できる1つの方法なんだなと改めて感じました。

【1：その他】

- ☐ 支援者が作品として取り上げることで作品になり、ゴミと扱ってしまうとゴミになってしまう。支援の重要性を感じました。
- ☐ 今現在、創作活動を行ってない方でも違う方向から作品にすることができたりする可能性がある事に気付かされた。創作活動途中であまり誘導しすぎない事を感じた。支援者の作品にならないように気をつけたい。作品制作の過程を紹介する事も大事だと感じた。過程を写真や文で記録しておこうと思う。
- ☐ いろんな方の作品に触れる事で、この方のこんなところも実は他の人にはない良い所であり、良い作品なんだなと改めて感じられる事ができました。
- ☐ これからも、利用者の創作活動の時間をできるだけ取り入れて、面白い作品ができるよう頑張ってみます。



【2-1：展覧会のテーマについて】

- ☐ 展示の仕方では展覧会の様子が変わり、絵が生きかえてくるような感じがします。
- ☐ 作品や作者さんのことを思いながら展示していくことの難しさも分かりました。
- ☐ その方のどういう所に惹かれたのか、改めて考えるきっかけとなりそうです。

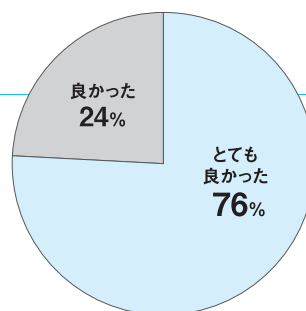
【2-2：持ち寄った作品の展示方法について】

- ☐ ありのままの作品の良さを、見に来ていただいた方に感じていただけたらいいなと思います。
- ☐ 展示会場に応じた展示方法があっても面白いと思うので、床に展示するやり方も面白いと思います。

【3-1：展覧会開催に向けて展示を実施。】

- ☐ 今まで絵を展示した事がなかったので、とてもむずかしかったです。
- ☐ 作品を見て、おあずかりして、本人の気持ちも一緒にれんが館に飾らせていただいた様な気持ちになりました。一枚の絵が、光、位置、場所によって、世界を生み出すのかと、改めて思い感激しました。

【全体を通しての感想】



DATA

【アドバイザー】柳健司氏(佐賀大学)

【第1部】平成29年8月9日(土)／牛津赤レンガ館／10名

【第2部】平成29年9月6日(土)／牛津赤レンガ館／12名

【第3部】平成29年9月22日(土)／牛津赤レンガ館／12名

つーつらアート展

福祉事業所のスタッフを中心に実行委員会を組織し、展覧会を作り上げました。
「自慢の作家を紹介したい」そんな思いを形にしました。

人材育成

つながり

流通

佐賀県の作家

思い伝わる



佐賀県内の8団体から21名の作家の作品を、支援者による実行委員が主体となって企画・展示を行いました。支援を通して作家の日常に深く関わっている支援者ならではの視点で作品と作家を紹介しています。

参加者アンケートから

☐ 建物の雰囲気と作品の展示がとてもマッチしていた。作品もすごく個性があって、どんな人が描いているのか人物像の想像がかきたてられた。

福祉に対する印象が変わっていきます。

☐ この展覧会を見て今まで気づかなかった世界に気づくことができ、良いものとなった。自分たちの持っていないようなものや、見えていないものなどを芸術を通して感じることができた。

ふれあうだけでは分からない心の奥の内側を自由に表現できる方法として芸術はすばらしいと思うし、それを多くの人が見ることで、変わるものもあると思った。

☐ アーティストの方が現地で作品展示している風景が動画などで分かるのが良かったです。

☐ それぞれの作者の方が思い描いている世界が絵という形で広がっていてとても興味深かったです。自分にはない発想ばかりで驚かされました。作品をじっくり見ていると新たな発見などもあり、楽しかったです。

☐ 作品1つ1つに作者の個性が出て、どれもすばしかったです。人をなごませる作品をどんどん作り続けてください。

☐ 細かい部分までこだわって描かれている作品に感動しました。普段の作者さんのこだわりを見ているようで楽しい。もっといろんな人に知ってもらいたいです。

☐ ハンディがありながら自由な発想の秀逸な作品の数々に感動しました！かれらの持つポテンシャルをぜひこのような場で伸ばしてあげてください！

☐ アート作品を、色々なグッズやTシャツなどにすると、多くの人にも知ってもらえそう。

☐ 私も絵をかくことが好きなので、一緒に活動してみたいなあと思いました。



☐ とてもとても素敵でした。元気が出ました。

☐ 制作中の映像が見れるのも非常に良かったので、もっと多くの方の制作中の風景を見てみたいと思った。

☐ 作品をポストカード等にして販売して頂ければ…

☐ とてもすてきな作品ばかりなので、ポスター・ロゴ・デザイン・本など、いろいろなところで生かされたいと思います。

☐ 2Fの会場なのでバリアフリーの場所であればと思いました。歩行器の方への対応ありがとうございました。

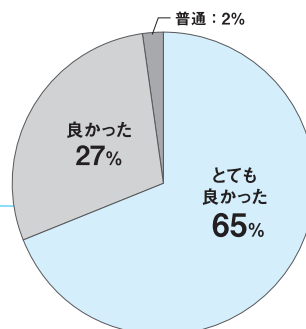
☐ 施設に来ていただいて絵（基本的なこと）を利用者に教えていただきたい。

☐ 活動をつづけてください。お願いします。

☐ アート作品を、色々なグッズやTシャツなどにすると、多くの人にも知ってもらえそう。

☐ このようなこころみが大きく広がって行く事を希望します。

【感想】n=94



DATA

平成29年9月23日(土)～10月6日(金)／牛津赤レンガ館／144名

1

2

事業報告

3

4

公募展 もうひとつのものさし展

佐賀県で活動されている方を対象に公募展を実施。
個性的な作品が多数応募されました。

人材育成

つながり

流通

発掘

佐賀県の作家

思い伝わる



佐賀市街地にあるバルーンミュージアムにて、“もうひとつのものさし展～ヌクモリノサキニ～”を開催しました。

昨年度に続き第2回目となる今回の展覧会では、「作者はどんな方で、どんな日常をすごしながら創作しているのかが垣間見える展示」を目指して、4名の作家の日常を記したパネルを添えての開催となりました。

展示空間は大通りからも見え、展覧会を見に来られた人はもちろん、街中を歩く人、ミュージアムに訪れた人など、たくさんの人にご観覧いただき、作品や作者の人となりを感じていただける機会となりました。



カメラを前に最初は緊張気味の広さん。どんな場面を描くことが多いかや、作品のこだわりなど、スタッフと一緒に和やかに取材は進みました。今回の展示では4名の作家全員に取材を行い、その様子は動画にして会場で上映しました。



参加者アンケートから

☐ 普段アートにも福祉にもあまり接点のない生活をしていましたが、ふらりと立ち寄って、すてきな絵を見ることができてよかったです。作家紹介ボードの文章も動画もすごくよかったです。またこういった機会があればぜひ立ち寄りたいです。HP も見てみます。これからも頑張ってください！

☐ ありのままの表現、感性あふれる表現、まさに展覧会名のように”もうひとつのものさし展”だ!! と思いました!! 自分の好きなことをありのままに表現できることのすばらしさ、自分自身の輝けるところを生かされているところにとても感動しました。

絵を通して人と人をつないでくれていて、それがさらに成長にもつながっているのだと思います。

誰もが、どこかに秘めた能力を持っているのだと改めて感じ、この会をぜひ、もっともっと多くの方に知ってもらいたいし、続けて頂きたいです。

☐ 今回は4名様で作品は少なかったのですが、ご本

人さんの普段の自然な等身大的写真があり、より身近に感じることができました。

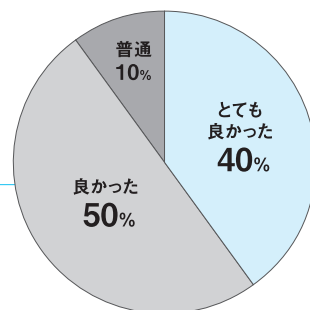
☐ 佐賀にも才能あふれるアーティストがたくさんいらっしゃるんだと改めて感じさせられ、私もアート活動を（利用者さんと一緒に）がんばろう!! とやる気と元気ができました。ありがとうございました。

☐ とてもステキでした。色がとてもきれい。壁に飾りたいと思いました。もっとたくさんの人たちの作品がみたいと思います。

☐ 遠くから見ても近づいて見てもすばらしい。ずっと見ていたい感じがしました。

☐ 色づかいがキレイで良かった。もっとたくさんの方の作品を展示してほしい。

【感想】



DATA

平成29年10月14日(土)～27日(金)／バルーンミュージアム(佐賀市)／9,125名

まちなか展示

店舗や公共スペースなどの身近な空間で、作品と出逢える機会を作り、障がい者の芸術活動への理解を広げていくことを目標としました。

人材育成

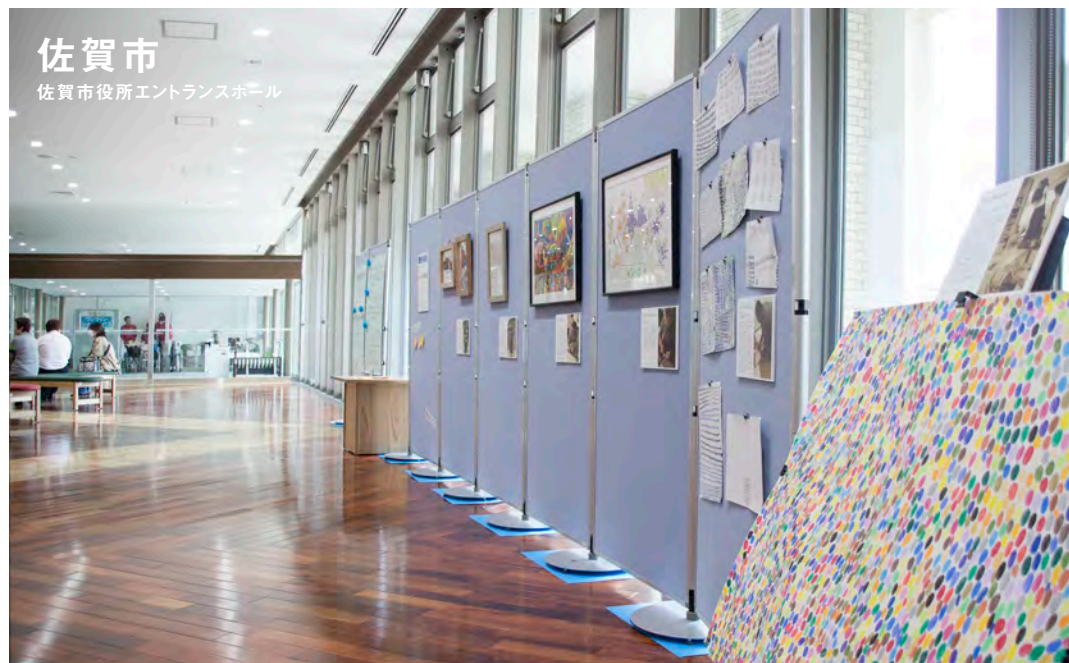
つながり

公共空間

佐賀県の作家

新たな出会い

日常とアート



美術館での芸術鑑賞とは異なり、鑑賞目的ではなく訪れた公共スペースなどで、思いがけず作品に触れていただくことは、普段福祉や芸術に馴染みのない方々と、障がいのある方の作品との新しい出会いに繋がった。



DATA

【鳥栖会場】平成29年9月9日(土)／フレスポ(鳥栖市)
 【唐津会場】平成29年9月16日(土)／アルビノ(唐津市)
 【多久会場】平成29年12月16日(土)／ボンダ(多久市)
 【鹿島会場】平成30年1月13日(土)／エイブル(鹿島市)
 【佐賀会場】平成30年3月27日(土)～4月6日(金)／佐賀市役所

参加者アンケートから

- ☐ 自由な発想と豊かな感性を感じました。もっと多くの作品を見たいです。
- ☐ やさしい花の風を感じます。
- ☐ ただただ美しい。
- ☐ 数がくり返し出てきて、でもそれがデザインとして眺められる不思議な作品です。味わい深いな。
- ☐ 色の取り合わせがカラフルでとてもハッピーな気持ちになります。
- ☐ マーブルチョコみたいで楽しい ^^
- ☐ みなさんの作品に感動しました。
- ☐ すばらしい カッコイイ!!
- ☐ 色づかいがとってもきれいですね。見習いたいです。

1

2
事業報告

3

4

協力委員会

協力委員会を開催し、多様な専門領域から
取り組みについての助言をいただきました。

人材育成

場所

つながり

文化

情報交換

これからに向けて



【第1回】今年度の実施事業について

- ☐ 商品化することを打ち出すことで混乱しないか。
- ☐ 施設職員を育てる方が良いと感じる。
- ☐ まず表現することがあって、それから商品化することに移る流れが良いと思う。
- ☐ モノを作ることありきのアート活動とならないか危惧している
- ☐ 佐賀県独自の賞として表彰ができないか。展覧会を使って事業の方向性を示してはどうか。
- ☐ 公募展に抵抗がある。選ばれるということは、選ばれない人もいるということ。競いたい人と楽しみたい人を分けて考えることができないか。
- ☐ 競うことと楽しむこと、どちらも正しい。わかった上で展示の方向性を分けている。その過程で、あわよくば天才が出てきてほしい。その研鑽の場のスモールステップとして「もうひとつのものさし展」がある。選ばれる喜びをつかむことも大事ではないか。
- ☐ 学童展に対して先生や保護者が受かり方を学んでしまっている。審査への対策を出来る人が受かり、

できない人は落選する。

面白い表現が拾われるべきだが、そのものさしを持っている支援者や評価者が少ない。

- ☐ 障がいは関係なく、社会が変わるような発信をしなければ、一団体ができる影響は少ない。社会が揺らいでいくような取り組みを積み重ねていくべき。
- ☐ ステージイベントで、発達障がいの方と一緒に演奏する機会がある。出てくる音に障がいは関係なく、障がいの有る無しに関わらず交われる場として有意義な演奏会だった。

- ☐ 障がいと関わる中で正解はなく、社会で交わる機会を作り、一緒に楽しむ場を作ることはとても大事。
- ☐ (パンフレットの作成に関して) 事業を時系列で表記している。目的別の柱を立ててどの対象者が何のプログラムに参加すべきか目視でわかるようになると尚良い。
- ☐ 障がい者作品展のチラシに選ばれた方がおり、ご家族は嬉しそうにしていたが本人の感情は推しはかることができなかった。

- ☐ 原点に立ち返ることも大事であり、この事業も何かの流れの中で実施するものであるため、何を目的に何を目指しているかというところは常に考えておく必要がある。

- ☐ この事業を通して、他の福祉ではできなかった地域を変えていくような取り組みができると感じている。

DATA

平成 29 年7月13日 / シアターシエマ (佐賀市)



【第2回】事業報告ならびに来年度へ向けて

□ 佐賀県の事業所へ工賃アップのコンサルを行っている。アートに取り組みたい施設の中には、流行りを感じ、サポートもあり、儲かるお得な取り組みではないかと勘違いしている施設もある。まず、なぜアートを行うのか。目の前の利用者や施設としてどうやって取り組んでいくか考えてもらう必要がある。

□ スター発掘プロジェクトの実施、昨年県内4カ所でダンスのワークショップを行い、そこから「魅せる」をテーマとした時、集客に関して何が障壁になるのか考えた。

のど自慢の予選会を参考に、ジャンルを問わず、なんでもありとして、自らの表現を自慢し合う会を開催したかった。皆さんの身近にもユニークな表現をする方がたくさんいると思うが、その方たちがどういったイベントに参加したいと思うか。これを来年度考えていきたい。

□ 教員を志す学生に、アール・ブリュットを卒論テーマとする方が出てきた。障がいを持った方の芸術活動に関する知識を持った人材を輩出できる環境を整え、学校の内側から教育現場の芸術への認識を変えていきたい。

□ 素晴らしい取り組みを行っている。メディアの立場として、発信していくお手伝いをしたい。

パフォーマンスや展覧会を通して、一般の方に素晴らしさの価値を広めたい。障がいについての偏見を解消するために力を発揮する分野だと感じる。

□ 事業としては、短い期間で成果を求められるが、本来文化は10～30年のスパンで普及していくもので、バランスが大事。3年の取り組みで少しずつ広がっており、今後は様々な方とコラボすることも検討されてはどうか。

□ アートや障がい、様々な取り組みに関してアンテナの高い方がおり、うまく繋がる手助けをしたい。

□ いずれクリエイティブな作家や作品が出てきた時、どのように権利を守っていくか。著作権等の研修を通じた知識を、障がい者やその支援者だけでなく、相手になる方や取り巻く環境と、相互に共通認識を持っておけることは極めて大切なことである。

□ デザインのプロの力を借りて、コラボしながら作品や商品を生み出し、最終的に収入につながる仕組ができれば素晴らしい。また、「障がい」をテーマとしない発表の取り組みが、長い目では生きてくる。

□ プロデュースができる人を広めても、販路まで作らないとサポートしたとは言えない。作ることで満足するのではなく、しっかり「売る」ことまでを考えてほしい。

□ ショップを出店したとして、誰に向けて売なのか？自分たちは「何屋さん」なのかが曖昧な事業所が多い。

□ 福祉がベースになると、「支援」が先にくる。障がい者がアートに取り組むのではなく、アートの場に障がいもあっていいのが自然。

□ 展覧会の場で作品をそのまま出すと、結局そこは「障がい者展」の延長でしかない。

デザインした企画を打ち出し、障がい者のアートを使って社会に何を伝えたいかが大事になってくる。

障がい者のアートは、2020年へ向けて盛り上がりを見せているが、その後必ず助成がなくなる時が来る。障がい者のアートがどんな力を持っているか。いずれ古いモノになる時、本物が残る。

☐ 美術という分野自体が世間一般からするとマイノリティ。その中で、障がい者のアートを知ってもらおうとする取り組みは難しいことにチャレンジしていると感じる。そこに、実用性を備えたものや、メディアと協力したり、お笑いやマンガだったり、大衆に向けたものに踏み込んでいくことも必要になる。

☐ アーティストとのコラボやデザイナーとのマッチングにも期待したい。

☐ アート作品を商品化するのであれば、デザイナーとの協力が一番。地域のデザイナーとマッチングを行い、しっかりと費用を払ってデザインした商品を販売している。

福祉施設の側は製造を担い、販売・管理は得意な業界や専門家と役割分担するということも必要。

☐ 出会う機会をどのようにつくっていくか。

ネットワークの輪を広げていきたい。

☐ 「スタ☆タン」(～雑多な音楽の祭典～／静岡県浜松市にて開催)に繋がる予選としての立ち位置となっていくとしたら、面白いことになるのではと感じる。表現をキーにしたつながりを伸ばしていき、本当に面白い人を呼びたい。

☐ 子供のように、楽しく事業に取り組んで欲しい。佐賀の(保守的で固い)県民性に一石を投じるような、そんな文化となるとすばらしい。

☐ (さをり織りに関して)佐賀の文化として緞通や鍋島折りなどという文化が育っている上で、それらと比べられるとどうしても弱い。良さをどう発信するかも大事になる。

☐ 福祉に関しては一般の立場としては、福祉の皆さ

んがそこまで気を配っていることを知り、とてもすごいと感じた。一方で、一般の目線からすると高度で難しいと感じる話も多かった。弁護士としてお手伝いできることがあれば協力したい。

☐ アーティスト・障がいのある人・大人・子供を100人くらい集めて、10メートルを越すような大きな作品を合作したい。是非企画してほしい。

DATA

平成 30 年 3 月 1 日／アバンセ(佐賀市)

平成 29 年度 協力委員会	
氏名(五十音順)	所属
蘭 英男	佐賀市障がい福祉課
岸川 啓介	佐賀県障害福祉課
栗山 裕至	佐賀大学教育学部(教授)
小松原 修	うれしの特別支援学校
角田 隆浩	社会福祉法人さくら会 障害者支援センター SAKURA
竹下 正博	佐賀県立美術館(学芸員)
富永 ボンド	ボンドグラフィックス
橋口 泰史	佐賀県文化課
廿千 博之	佐賀県身体障害者団体連合会
樋口 龍二	特定非営利活動法人まる
永尾 友譜	株式会社サガテレビ
宮崎 圭子	佐賀市教育委員会文化振興課
安永 宏	安永弁護士事務所(弁護士)
福島 龍三郎	社会福祉法人はる

Chapter 3

調査・発掘・評価・発信

- アンケートの実施
- 公募展「もうひとつのものさし展」
- パフォーマンス・ステージ「スター発掘プロジェクト」

アンケートの実施

発掘

評価

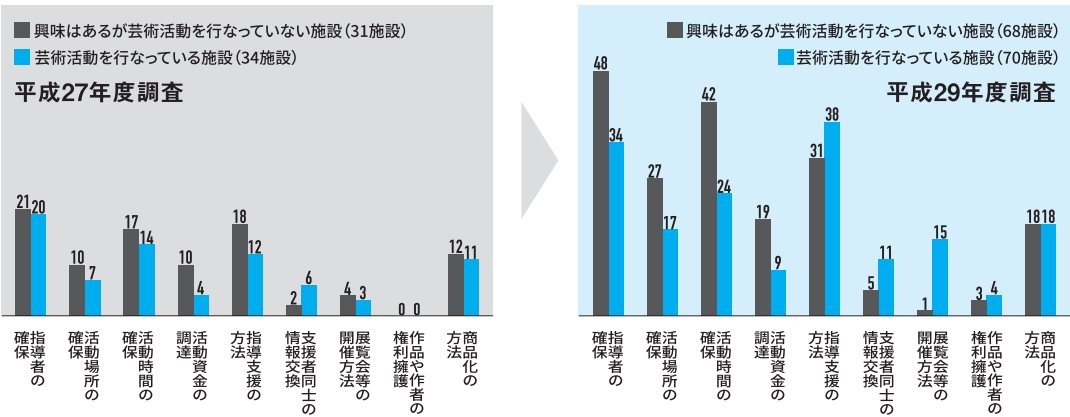
発信

佐賀県文化課において、平成29年度 芸術活動についてのアンケート調査が行われた。
平成25年度・27年度に続き、佐賀県域の障がい者が活動を行っている事業所、特別支援学校、精神病院、合計 473 ヶ所に対して実施。3年目を迎える事業の経過が窺い知れた。

表「Q7」より、課題意識について

平成27年度の「場所、指導者、支援方法」から、今年度は「指導方法、展覧会の開催方法、商品化」といった回答が増えていた。興味はあるが、何から始めて良いか分からなかった段階から、芸術活動を行う中でより活動を充実させる段階へとシフトしている。また、作者や作品の権利擁護の課題意識を持つ事業所が現れ、作品取扱規程を定める事業所について、平成27年度は0だったが、平成29年度は5件が作成との回答があがっている。少しずつ作者の権利をどうやって守っていくか、認知が広がっている。

Q7. 芸術活動において、現在の課題や必要としていることがあれば教えてください。 ※複数回答可



平成 27 年度・平成 29 年度のアンケート結果比較

項目	平成 27 年度 (事業所数)	平成 29 年度 (事業所数)	比較
障害者の芸術活動について関心があるか	65	139	約2倍に増加
芸術活動を行っているか	33	70	約2倍以上に増加
誰と行っているか 職員	26	59	職員と行う事業所が多い
誰と行っているか 外部講師	13	17	
作品発表の場 施設内	25	54	施設内の展示にとどまらず、 展覧会出品や商品化も増加
作品発表の場 展覧会出品	17	27	
作品発表の場 商品化	13	17	
作品取扱規定を定めているか	0	5	規定を定める事業所増加(事業所3、病院2か所)
芸術活動における課題※上位2項目(活動を行っていない施設)	・指導者確保 ・活動時間確保	・指導者確保 ・活動時間確保	課題は2年前と同じ
芸術活動における課題※上位2項目((活動を行っている施設)	・指導者確保 ・活動時間確保	・指導支援方法 ・指導者確保	H29では、指導支援の方法が課題になっている

公募展「もうひとつのもののさし展」

発掘

評価

発信

佐賀県内に障がい者が応募できる展覧会が少ないことから、発表の機会という点でも意義がある。指導の色が伺える作品や、既製品を応募する方も多数いる一方で、「自宅でコツコツと創作した作品を大事に保管している」という方につながることもできた。作者の個性を感じられる作品ばかりではなかったが、個性を感じられる作品が「応募すべき作品」だと認識されていないのか、そもそも「個性が発揮される創作環境」が支援者の理解も含め整っていないのか。引き続き調査が必要である。

入選者の創作現場まで出向き、作者の日常や作品の数々を取材し、観覧者へより深く創作の背景を伝えることができた。多くの一般の方に観覧していただき、「障がい」へのイメージにアートからの視線を取り入れて感じていただける機会となった。

パフォーマンス・ステージ「スター発掘プロジェクト」

調査

発掘

評価

発信

佐賀県内でどれほど障がい者の音楽や舞台等の活動がなされているか未知数の中で、前年度までの相談に「音楽やダンスをしたい」といった内容もあり、パフォーマンスを希望している方が県内にいるであろうという見込みで、初めて実施した。

「パフォーマンス」という言葉は“演目”や“レベル”にとらわれない幅広い意味合いを持つので“なんでも受け入れる”イメージゆえに、自分のやりたいことを自由に応募してもらえたようだ。障がいのない方も当たり前に出演し、

観客一同一体的に盛り上がったことは来年度以降の開催に向けて良いスタートが切れたと考える。劇団などがベースでしっかり訓練したパフォーマンスとはまた違った、歌ったり踊ったり、表現することが大好きな方々が集う場として、様々な表現を認め合って、楽しむ場としてステージが成長していければ幸いであり、発掘・発信の場としても機能していくと考えられる。



1

2

3

調査・発掘・評価・発信

4

“ありのままの表現”を感じてもらうために 一つつらアート展

作品と作家の人となり、ありのままに感じてもらいたいという思いから、その作品が生まれる過程や作品と作家の関わり方を、鑑賞者にイメージしてもらえる様な展示を行いました。作家と支援者が共に作り上げた展示のかたちです。



Chapter 4

成果と課題

成果

- 芸術活動の裾野の広がり
- 一人の表現者としての紹介
- ネットワークの構築

課題

- パフォーマンスのニーズの発掘
- 福祉以外の人材とのつながり
- 「裾野を広げる・一歩目を踏み出す」の次のステップ

今年度の成果

障害者の芸術活動支援モデル事業での活動を含め、3年目の事業となった。

「裾野を広げる・一歩目を踏み出す」をテーマにスタートした

佐賀県の障害者の芸術活動支援について、一定の成果が見えてきている。

芸術活動の裾野の広がり

平成27年度と29年度の「障害者支援事業所等における芸術活動におけるアンケート」では、芸術活動への関心の増加が反映されている。「障害者の芸術活動について関心があるか」の結果が、65件から137件へ2倍の回答となった(p34参照)。事業スタート時点では活動事例を知る方法が少なく、芸術活動が上手いくイメージが湧かないといった声があった中で、現在は県内に複数のモデルケースが存在し、新たに取り組みたい事業所の参考となっている。3年間で実際に創作活動をした方、展示に関わった方、鑑賞した方、身近に体験した方々をベースに、裾野が広がりつつ、ステップアップの下地も整ってきている。

一人の表現者としての紹介

施設のアート活動で一斉に創作した作品から、日常の表現（行為、音、創作）に目を向ける支援者が出てきている。支援者目線でアートかどうかを判断した際に、今までは見逃されがちだった作品や行為について、どうにか紹介したいと考始めた支援者も出てきた。個々の障がいを持った方に向き合い、なぜアートで発信をするのかという問いが、創作環境や支援の充実につながっていくことを感じ始めており、その結果作家の創作意欲の向上や、作品や展示のクオリティが上がっていくきっかけをつかみ始めている。

ネットワークの構築

各施設で芸術活動の担当職員が定着し始め、参加型展示会をはじめとした各研修プログラムで顔を合わせる機会が増えてきている。それぞれのよく知る作家や作品を紹介したい、よりよい展示の方法を学びたい、というステップにきており、当事業の企画以外の場合でも、相互に交流し合うつながりもでき始めている。福祉の中でのネットワークはできつつあるので、今後はデザイナーなど福祉以外の分野で、スキルを持っている方とつながる機会を作っていきたい。

これからの課題

「裾野を広げる・一歩目を踏み出す」というステップから、
少しずつ次のステップに移る過程で、新たに課題が見えてきている。

パフォーマンスのニーズの発掘

相談支援の問い合わせの中で、「美術」だけが対象なのか、音楽やダンスについてはサポートを受けられますか、との声が複数寄せられている。今年度、「緊張と向き合うワークショップ」へは20名の参加があった一方で、ステージでパフォーマンスを披露したいという希望者は4名。発表の演目、メンバー、レベルなどがわからない中で、それでも演じたい方々の応募があった。今年度の実績より、イベントのイメージが湧きやすくなることを踏まえ、パフォーマンスの希望者が手を上げやすいように周知を行っていききたい。

福祉以外の人材とのつながり

参加型展示会（つーつらアート展）を作り上げる過程で、大学の先生からの大胆なアドバイスにより、発想の枠を超えて支援者がワクワクする場面があった。また、普段支援者として接しているなかで、障がい者の「何気ない」と思っていた一面が、自慢できる一面であることを認識でき、美術の発想を取り入れることで、福祉の良さに気づける機会もできた。このようなきっかけをより多くの方々に体験してもらうための取り組みも検討したい。

「裾野を広げる・一歩目を踏み出す」の次のステップ

佐賀県内の複数の施設で芸術活動の取り組みが定着し始め、作品を生み出す環境を作っていくステップから、生まれた作品をどう活かすか、作者とどのように充実した創作活動を作っていくか、というステップに移ってきている。作品をどう活かすか（芸術活動の収支とも関連しながら）の一つの方法として「商品化」があるが、県内でも安易なグッズ化によってクオリティ不足や販売に結びつかない事例があった。今年度は丁寧に商品化についての初歩を進めたが、この知識をベースに、デザイナーとの協力など、ブランディングやマーケティングの面でも、福祉のスタッフ以外の人たちとのつながりを創っていくことに取り組んでいきたい。

1

2

3

4

成果と課題

ゆっくりゆったり アートの日 “ゆつつらアートDAY”

「ゆつつら」とは、「ゆっくり・ゆったり」という意味の佐賀の方言。
「ゆつつらアートDAY」ではアトリエ・サンのフリーオープン日として、名前の通り、ゆっくりと、自由にそれぞれのスタイルで、創作活動に取り組んでもらっています。



もうひとつのものさし展

～ヌクモリノサキニ～

作家紹介



Kenichi Kamo

Mami Iwanaga

Akari Ezoe

Hiroshi Noda

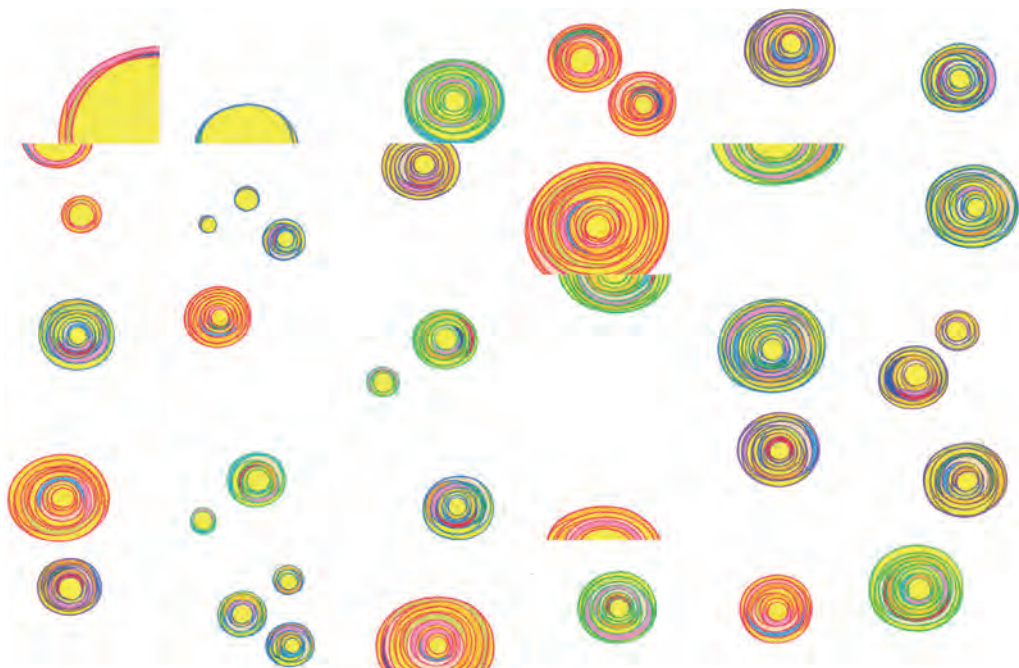


Kenichi Kamo

加茂 賢一

1976年生まれ 東京で生まれ育ち、現在は父親の出生地である佐賀県唐津にて、農業に携わりながら作品制作に取り組んでいる。今の絵画のスタイルは、30歳のころに入院したことがきっかけだと本人は言う。リハビリを兼ねてサークル活動で絵を描き始め、日々繰り返すうちにいつしか習慣となった。彼の作品は、ご先祖様から受け継いだ写真をモチーフとしていることが多い。どこの国で撮影したのか。何をしているところを撮ったものなのか。思いを馳せながらモノクロの写真に、彼なりの色彩を加えていく。無心で制作に没頭している瞬間が、一番の幸せを感じる時だ。





Mami Iwanaga

岩永 真実

1985年生まれ 彼女の創作は、彼女を取り巻く様々な日常から生まれている。例えばそれは、母親が大好きなものであったり、飼っている猫であったり。彼女は毎朝カフェに通い、お気に入りの席に座る。クーピーを手に一呼吸。街の喧騒は瞬間に無音の世界となる。思い通りの絵が描けるまで、何度も破っては描きを繰り返す。描き続けた絵は、彼女と周りの人とをつなぐ架け橋になっていた。

世界中の人に「たいようのえ」を見てもらうこと。希望ややさしさ、生きる力を届けること。それが彼女の夢である。

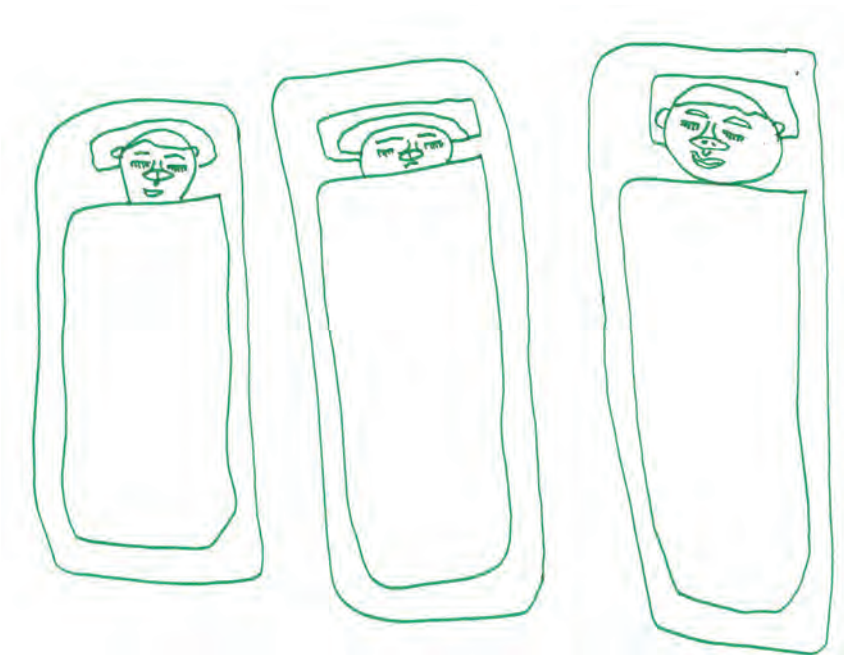


Akari Ezoe

江副 朱華里

1996年生まれ。乙女な心を持った彼女が描く作品はとても可愛らしく、普段付けているヘヤゴムの色や服の組み合わせも、沢山の色や柄を豊かな色彩感覚でバランスよく配色し、毎日可愛く仕上がっている。作品の数々にも、その独特のバランスによって作り出される、明るい色のグラデーションが華やかに表現されている。大好きな動物を描く時には、とても楽しそうに説明しながら筆を走らせる。画用紙に鉛筆で丁寧に下書きをし、黒のサインペンで縁取りを行う。その後、カラフルなサインペンや色鉛筆を巧みに使い分けて、時間をかけて彼女の世界を表現していく。小さな頃より、絵を描くことや創作することが好きで、お家でも時間を見つけては切り絵を楽しんでいる。





Hiroshi Noda

野田 広

1950年生まれ

キーボードで曲を弾いたりする芸術的な一面。重いものを率先して運んだり、走るのが速かったりと活動的な一面。「のだひろし」といえば、そんな一面が思い浮かぶ。そんな彼は、5年ほど前に小さな転機を迎え、施設のアーティストとしての人生が始まることとなった。彼の描く絵の中には、独創的で、ほのぼのとした、観る人の気持ちを暖かくしてくれる絵がある。机に向かうと、その時々描きたいと思ったことを描く。彼が昔、経験したことや、動物の絵を描くことが多い。スタッフがテーマを提供しても、気分がのらないときには手は進まない。気分がのっているときは、裁断した厚紙の切れ端にも描いたりしている。



障がいのある人の芸術活動を支えるためのスキルアッププログラム



田口ランディ氏講演会
人が表現するということ



つーつらアート展



オリジナルグッズをつくろう! ワークショップ
in 鳥栖



オリジナルグッズをつくろう! ワークショップ
in 唐津



オリジナルグッズをつくろう! ワークショップ
in 水戸



障がいのある人の表現活動を考えるセミナー



お気に入りの絵を“グッズ”にするための
セミナー



スター発掘プロジェクト



もうひとつのものさし展



オリジナルグッズをつくろう! ワークショップ
in 鹿島



ゆっつらアートDAY



SAGA ART BRUT NETWORK Web Site



FACEBOOKページ SANC(サンク/佐賀県芸術活動支援センター)



社会福祉法人はる

「私たちの願いは、障がいのある人たちが、自分の人生の主人公として、生涯を通して、地域とともに幸せに暮らしてもらうことです」という理念のもと、子どもから大人まで、生涯を通して地域で暮らすことができる体制を作ること、また、仕事や様々な活動を通して地域の方たちと触れ合ったり、協働することで、障がいのある人たちの生活が豊かになり、地域の理解も深まる活動に力を入れています。

〈実施事業〉

- ☐ 生活介護事業所ライフサポートはる（定員 20 名）
- ☐ 就労継続支援 B 型事業所ワークスペースかん（定員 20 名）
- ☐ 居宅介護事業所ヘルパーステーションはる（行動援護・身体介護・家事援助）
- ☐ グループホーム（定員 31 名）
- ☐ ショートステイ（定員 6 名）
- ☐ 放課後等デイサービス事業所じゃんぷ（定員 10 名）
- ☐ 相談支援事業所はっと
- ☐ Saga Art Brut Network Center（サंक）
- ☐ 佐賀県強度行動障害支援者養成研修
- ☐ きてみんしゃいカフェ

SAGA ART BRUT NETWORK

平成 29 年度 障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

〔企画・編集・発行〕

社会福祉法人はる

SANC (Saga Art Brut Network Center)

〒849-0917 佐賀県佐賀市高木瀬町大字長瀬1168-1

TEL 0952-37-7078 / FAX 0952-34-1024

MAIL halhal@life-hal.jp

Web(社会福祉法人はる) <http://life-support-hal.net>

Web(SANC) <http://s-brut.net>

〔発行責任者〕

福島 龍三郎（社会福祉法人はる 理事長）

〔構成〕

上田 諭（SANC）

〔デザイン〕

大石 哲也（SANC）

〔助成〕

平成 29 年度 障害者芸術文化活動普及支援事業（厚生労働省補助事業）

イラストレーション(表紙・目次)：河島晋作